

( 続紙 1 )

京都大学	博士 ( 人間・環境学 )	氏名	水野 千依
論文題目	ルネサンスの図像における奇跡・分身・予言——イメージ人類学的視座から——		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、イタリア・ルネサンス文化におけるイメージの地位と機能をめぐる諸問題を、歴史人類学的視点から問い直すことを目的とするもので、次の五つの章から構成されている。すなわち、第一章「聖なるものの地政学」、第二章「像の活性化／無効化の力学——中世末以降の聖像の修復」、第三章「痕跡と分身——ルネサンス肖像史再考」、第四章「〈肉の目〉と〈心の目〉——心の祈祷の実践と図像」、第五章「予言と幻視——ルネサンスの終末論文化における図像の地位」である。ルネサンスといえば、一般には「芸術の時代」とされるが、本論文では、芸術上の革新に加えて、当時の文化に息づいていたイメージのもうひとつの側面、すなわち古代の異教的慣習や土着の民間信仰の残滓などを深く刻み込んだ、異種混濁にして複雑なイメージのあり方に目が向けられている。ルネサンスに生まれたイメージへの美的な視線は、先在する宗教的で「迷信的」ともされる伝統的態度といかに関わっていたのか、また両者の対話的出会いはいかに新たなイメージの歴史を紡ぎだしたのか、こういった問題が、豊富な一次資料の精確な解読と、数多くの具体例の緻密な分析を通じて明らかにされる。</p> <p>第一章では、中世末からルネサンス期にかけてトスカーナ地方で流行した聖母像崇敬が取り上げられる。当時、自然災害や政治・経済的危機を前に聖母に救済を求める声が高揚した。「アケイロポイエータ (人の手によらないイメージ)」の伝承をもつ数々の礼拝像を有するローマにたいして、由緒正しい聖像をもたないトスカーナ地方はいかにして「真正な」像を獲得するに至ったのか、その経緯と論理が、とりわけ《インプルネータの聖母》のケースを中心に考察される。異教的なものの残存やフォークロアにもとづいてフィレンツェの田園地方に誕生した奇跡の聖画像は、都市の政治的・宗教的な戦略によっていかに吸収され利用されていったのかが、当時の一次資料の分析などを通じて明らかにされる。</p> <p>第二章では、ルネサンス文化が像に奇跡の力を認めていたとするなら、その力はどのように統御されたのか、この点が、古い奇跡像にたいする当時の修復的処置から分析される。十四世紀にトスカーナ地方で制作された多くの聖母子像は、その後何度も上から塗りなおされたり、描きなおされたりしてきた。像に宿るとされる奇跡の力を絶えず新たに更新し活性化させるためである。しかし、その一方では反対に、これらの像をわざと傷つけたり破壊したりすることで、その力を失効させるということも行われていた。しかも同一の聖母子像がこれら二つの行為の対象となったというケースも少なくない。このように像への修復処置と冒瀆行為という、一見すると相反する二</p>			

つの態度が、聖画像の受容において実は密接に結びついていたことが本章で明らかにされる。

第三章では、肖像と痕跡の問題に焦点が当てられる。ルネサンスの肖像画はこれまで一般に、当時の芸術的・美的革新のなかでも画期的な写実技法の所産として評価されてきた。しかし、多くの作例が、ライフ・マスクやデス・マスクといった、実際のモデルから型取りされた蠟製の像にもとづいて制作されたことがわかっている。いわば蠟人形である。さらには、そのようにして制作された蠟製肖像が、エクス・ヴォト（奉納像）としてフィレンツェをはじめとするイタリア各地の教会堂の内部に飾られていたことも、作品や資料から裏付けられる。迫真的で新しいリアリズムの精華とされるルネサンスの肖像画は、実は古い異教的な風習——古代ローマの祖先の肖像（イマギネス・マイオールム）、「王の二つの身体」に象徴されるような埋葬儀礼など——を長く引きずっていたのである。本章では、この意外ともいえる事実が、具体的な作品分析と一次資料から明らかにされる。それはまた、ルネサンスにおいて古来の像魔術的要素が残存していたことの証拠でもある。

第四章では、「肉の目」に対して「心の目」を重視し鍛える「心の祈祷」「心の巡礼」と称される瞑想法が、十五世紀後半から十六世紀前半にかけて広く普及していく過程が、主に北イタリア（ロンバルディア地方およびヴェネト地方）を中心にたどられる。そこにおいて、聖画像は「心の祈祷」へと入っていくための重要な手がかりとして利用されることになるが、そうした受容形態のなかで、図像や様式にいかなる変容が見られるのかが明らかにされる。さらに時代背景として、異端とされたカトリック内部の改革派や、ルター共鳴派などの宗教性が、こうした瞑想法や図像の発展にいかなる影を落していたのかについても検討される。

最終章では、十五世紀後半から十六世紀初頭にかけてイタリアで大流行した終末論的予言や奇跡のテーマが、テキストとイメージの両面から明らかにされる。なかでも田園地方における聖母の顕現と怪物の誕生という現象に注目し、終末論的な状況の中、そこでイメージがいかなる政治的・宗教的・社会的機能を果たしていたのかが分析される。さらに、世紀後半における予言文化の終息と断片的な残存が、ヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂の黙示録モザイク装飾をめぐる異端審問記録を手掛かりに考察される。

(論文審査の結果の要旨)

本論文の最も大きな独自性は、イタリア・ルネサンスの美術に、従来の方法論とはまったく異なる新しい観点からアプローチしている点にある。数々の巨匠や傑作に彩られるルネサンス美術はこれまで多くの場合、様式論や図像学という観点から、作家論や作品論として扱われるのが主流であった。これにたいして本論文は、その対象についても方法論についても、新機軸を打ち出している。すなわち、対象に関しては、いわゆる美術作品として高く評価されてきた巨匠たちの作品ばかりでなく、作者不詳のままに伝えられてきた作品、田舎の教会堂の忘れ去られた壁画や祭壇画、民衆的な奉納像（エクス・ヴォト）、蠟人形、廉価な一枚刷り版画等なども含めて、きわめて幅広くとらえている点が本論文の大きな特徴として挙げられる。

さらに方法に関しては、ルネサンスの造形的な遺産を、それが制作され受容された社会的・政治的・宗教的なコンテクストとの密接な関連性においてとらえようとしている点が特筆される。こうした方法は、「歴史人類学」や「イメージ人類学」と呼ばれる方法とも通じるもので、本論文は、わが国ではじめて本格的にこの方法によってイタリア・ルネサンスの造形文化を包括的に論じたものとして、きわめて高く評価される。その結果明らかとなるのは、中心（都市）／周縁（田園）、高い文化／低い文化、正統／異端、古さ／新しさ、保存／抹消、言葉／イメージといった、固定的な二項対立ではもはや把握することのできない、両者が相互浸透するようなイメージの社会的な機能である。

たとえば、聖画像を上から何度も塗りなおすことで、その奇跡の力を絶えず更新させようとしてきたという、十四・十五世紀のフレンツェの《聖母子像》の例を分析した第二章「像の活性化／無効化の力学——中世末以降の聖像の修復」では、偶像の修復と破壊、記憶の保存と抹消とが背反するものではなくて、同じコインの裏表であることが論じられる。さらに、第三章「痕跡と分身——ルネサンス肖像史再考」では、リアリズムを極めたとされるルネサンスの肖像画が、実は、古代ローマの祖先崇拜や中世フランスの埋葬儀礼の風習とも深いところでつながっていることが明らかにされる。つまり、ルネサンスのいわゆる「高級芸術（ハイ・アート）」のなかにも、古代以来の像の魔術の要素が根強く残っていたのである。あるいは、第五章「予言と幻視——ルネサンスの終末論文化における図像の地位」では、十五世紀末から十六世紀前半にイタリアを中心に広く流布した怪物の図像が検討されているが、同じ図像が、カトリックを擁護する側と攻撃する側の両方から、それぞれ反対の意味を付与されて利用されていたことが、鮮やかに浮かび上がらされる。こうした事実の解明は、本論文が広い視野に立ち、領域横断的な方法論を採用したからこそ可能になったものである。

次に本論文の高く評価すべき点は、十四世紀から十六世紀のイタリア語の一次資料を豊富に渉猟している点である。そのなかには、出版されていないものも含まれていて、現地の図書館や古文書館で調査したものも少なくない。たとえば、第五章で取り

上げられている、十六世紀末のヴェネツィアのサン・マルコ大聖堂の黙示録モザイク装飾をめぐる異端審問の記録などがそれに当たる。どの一次資料に関しても出展や原文が注でしっかりと明記されており、歴史研究としても高いレベルを保持している。また、その邦訳も正確にして的確なものである。

最後に、本論文が傑出しているのは、現地の多くの教会堂や礼拝堂などに実際に足を運んで、具体的に作品を調査し、写真資料などにおさめている点である。それらのなかには、トスカーナの田園部（コンタード）や北イタリアのアルプス山麓の小礼拝堂なども含まれ、これまでほとんど論じられることのなかったものも少なくない。とくに、ルネサンスにおいても流行していた奉納像（エクス・ヴォト）について論じた第三章や、「主日のキリスト」という特異な図像の社会的・宗教的機能について緻密な分析を試みている第二章では、ピエモンテ、フリウリ、トレンティーノ、ティチーノなど北イタリア各州の小礼拝堂はもとより、スイスにまで調査が及んでおり、この図像がいかなる地理的な範囲で広まり、いかなる役割を果たしていたかが明らかにされている。その成果は、わが国のルネサンス研究においてはもとより、世界的に見ても特筆すべき水準に達するものである。

以上を総合して、本論文は論文博士（人間・環境学）の学位論文としての価値を有するものと判定される。また平成22年5月5日、論文内容とそれに関連する事項に関して口頭試問を行った結果、本論文を合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降